

# 令和元年度「大学生の力を活用した集落復興支援事業」報告書

エコ・カフェ秋川<sup>\*</sup>（東北文化学園大学）

## 1. 課題 —私たちの目的—

1980年代以降、「地球規模の環境問題<sup>1</sup>」が認識され、現代文明の持続可能性(sustainability)に対する警鐘が鳴らされてきた。地球環境問題は「産業革命」や「経済成長」の成果としてもたらされた豊かな物質文明を享受してきた人類の共通の課題である<sup>2</sup>。しかし、周知のように、化石燃料を動力源にして温室効果をもつCO<sub>2</sub>やNH<sub>4</sub>等を大気中に放出する経済システムを「京都議定書」や「パリ協定」などの国際的な取り決めのみで解決するのは困難である。そのような現状をふまえ、私たちは現代の経済システムに対置しうる伝統的な地域文化の中から祭祀や年中行事など持続性の維持に必要な知恵や技術を抽出し、古くて新しい持続可能な生き方や考え方を掘り起こしながら継承していく農村立地型キャンパスのあり方を提起したいと考えている。

## 2. 安藤昌益の「直耕」という考え方

安藤昌益は、四季がめぐる1年を自然の諸要素が生成・循環・消滅を無限にくり返す過程の一部として捉える（<sup>てんち</sup>転定の直耕）ことで正しく認識できるとし、自然と調和して生きようとすれば、人間も「<sup>ちよっこう</sup>直耕に生きるべきである」としている。昌益によれば、人間には土を耕し、衣食住を自給自足する能力が備わっているのであるから、その能力を使って生きること（内なる自然に従う直耕）こそが人間本来の自然な生き方である、ということになる。それでは、そもそも「直耕」とは何か。自らの衣食住を他者に依存せず、自らの力で自給自足するという人間の「直耕」は容易に想像できる。しかし、「<sup>てんち</sup>転定（天地）の「直耕」とは何か。仮に、それが天地自然の循環運動の総体を意味するとすれば、宇宙の生成からウィルスや素粒子の運動までを含むことになり、その全体像を想像することは極めて困難である。江戸時代の先進的知識人であった昌益は日常生活において（儒学に偏倚した）学問的知識の価値は低く、人間の「直耕」を阻害する現実的諸問題（身分制度等）の解決が大切であると考えていたのではないだろうか。

## 3. 「直耕」に対するソローの憧憬

米国資本主義の草創期を生きた H.D.Thoreau（1817-1862）は侵略的拡張を続ける国家にライシーアム<sup>3</sup>の講演活動などを通して警鐘を鳴らし<sup>4</sup>、マサチューセッツ州コンコードの

---

<sup>\*</sup> エコ・カフェ秋川の参加者は、遠藤翔一朗、大山美桜、櫻井悠貴、鈴木基文、千葉悠貴、早坂俊祐（3年次6名）、清野知飛路、曾根裕聖、平塚航太（2年次3名）、浅黄秀太、井崎崇人、遠藤明日香（1年次3名）の12名。指導教員は秋川信弘（harai@pm.tbgu.ac.jp）である。

<sup>1</sup> 「地球温暖化」等による生命体への影響を典型例として想定している。

<sup>2</sup> 当該意識の顕在的形態として持続可能な開発目標（SDGs）等を想定している。

<sup>3</sup> 当時の市民向け公開講座であり、後述の「村の大学」構想とも関連する。

<sup>4</sup> 「朝のオンドリのように、元気よく誇らかに歌うことにした。隣人たちの目を覚ますことさ

農業青年が相続によって苦境に追い込まれる現実<sup>5</sup>を批判的に追体験し、時代遅れの方法で「マメ畑」を営むことで時代を先取りした。「Walden」はその中から創造された作品であり<sup>6</sup>、「その神聖な起源を思い起こしたりするための祭り<sup>7</sup>」を失い、「自然」を盗賊の立場から知っているにすぎない」農業を批判した。当時、米国では金融資本がアイルランド移民の低賃金労働力を利用して鉄道敷設を進め、農業分野でも輸送革命による競争や技術革新が進展し、自然と調和する清教徒的独立自営農民が営む自給的農業は消滅しつつあった。

「一時間で世界のあらゆる時代を生きなくてはならない」(ソロー[1995a], p.23)とするソローの命題は、昌益の「直耕」に通じるものであると考えられる。「われわれは、太陽が自分たちの耕地や平原や森を分けへだてなく見おろしていることを、とかく忘れがちである。それらいっさいが日光を反射すると同時に吸収してもいるのであり、耕地は太陽が毎日の運行の途中で眺める壮麗な風景画のほんの一部にすぎない。太陽から見れば、地球全体が菜園とおなじようにひとしく耕されているのだ。だからわれわれは、その光と熱の恩恵を、それにふさわしい信頼と雅量をもって受け入れなくてはならない。」(ソロー[1995a], p.295)

地球という菜園を太陽が耕すとは転定の直耕<sup>てんち ちよっこう</sup>の具象化であり、その「恩恵」に対する信頼と雅量 (*trust and magnanimity*) とは人間的「直耕」の含意であろう。「マメの一部分はウッドチャックのために育つ」(ソロー[1995a], p.296) のであり、「雑草の種は小鳥たちの穀物庫になるのだから、雑草が生い茂ることもよろこぶべき」(ソロー[1995a], p.296) なのだろう。しかし、「畑の産物に対するいっさいの請求権 (*claim*)」を自然に捧げることを生きる目的とする「まことの農夫 (*the true husbandman*)」の場合はそれでよいかもしれないが、商業的農業で生計を立てる農民はどのように家族を養えばよいのだろうか<sup>8</sup>。

農業者としてのソローは、9bus.12qt. (☞ 9.375bus. ≒ 255kg) のマメを \$ 16.94 で販売し、種用と食用を等価と仮定すれば、種用 1.73bus.<sup>9</sup> を \$ 3.125 で買い、収穫した 12bus. (7倍) 中の 9.375bus. (78%) 分を販売して \$ 16.94 (種代の5倍強) の売上を得た(ソロー[1995a], pp.289-290)。現金収入を目的に「ドルに換えられる」(ソロー[1995b], p.48) マメ畑の草取りをしていたソローが相応の「信頼と雅量」を保持できなかったことは自明であろう<sup>10</sup>。

労働の成果を神に捧げるという考え方はソローが傾倒した東洋的な宗教観<sup>11</sup>に由来し、

---

えできればそれでよいのだ。」(ソロー[1995a], pp.150-151)

<sup>5</sup> 「農場、家屋、納屋、家畜、農具などを親から相続したために、かえって不幸になった、わが町の若者たち」(ソロー[1995a], p.12) の背後には、「農場を名実ともに自分のものにしようとして、20年、30年、40年と汗水流して働いている(そのかせぎの3分の1は家屋の費用に消えてしまうとみてよい)。というのは、彼らは抵当にはいったままの農場を相続したか、土地を借金で買い入れた場合が多いからで、しかもたいていはまだ返済できないままである」(ソロー[1995a], p.61) という社会状況(金融資本の寡占状態等)が存在していた。

<sup>6</sup> この意味で『森の生活』は「時間」を超越した「杖」に比定される。

<sup>7</sup> 共同体の調和と秩序を保証する靱帯としての「聖なる存在と儀式」はコミュニタリアニズムの視点から再評価されている(小林[2016], pp.141-146)。

<sup>8</sup> 「まことの農夫は心を労することなくその日その日の労働をこなし、畑の産物に対するいっさいの請求権を棄てて、最初の実りだけではなく最後の実りも、心のなかで神々への生贄として捧げようとする」(ソロー[1995a], p.296)

<sup>9</sup>  $9.375(\text{bus.}) : 16.94(\text{ドル}) = x(\text{bus.}) : 3.125(\text{ドル}) \quad \therefore x = 1.73(\text{bus.})$

<sup>10</sup> 「私の畑のインゲンマメを熟れさせてくれるその太陽は、同時に地球とよく似た太陽系のさまざまな天体を照らしている。この事実を忘れずにいたならば、私はいくつかの過ちをまぬがれていただろう。マメ畑の草取りをしていたとき、私はこの光に照らされていなかったのである。」(ソロー[1995a], p.23)

<sup>11</sup> 「私は東洋人の言う瞑想とか、無為という言葉の意味を悟った(中略)時間がすぎていく

モノへの執着を断ち、自然に捧げる「直耕」の一形態であろう。「われわれは、いま信じているよりもずっと多くのものを、安心して信じてよいと思う。一身上の問題ではあまりくよくよしないようにし、むしろ本気で別のことに関心を振り向けることにしたい。自然は人間の強さばかりでなく、弱さともうまく折り合ってくれるものだ。」(ソロー[1995a], p.24)

「生きること」(“life”)は「奇跡」であり、生命を維持するという「奇跡」を有意義なものにすべきであるという点は“Walden”における重要な主張である<sup>12</sup>。「想像上の事実を実行して、悟性上の事実に戻元したとき(中略)人生をその基礎の上に築くことができる」(ソロー[1995a], p.25)すなわち、人間的「直耕」とは空想的世界を体験的に理解(fact to his understanding)することであり、「転置(天地)」の「直耕」との関係を通して自らの品性を高めていく行為(人事を尽くす)を意味していると考えられる<sup>13</sup>。

#### 4. 与次右衛門による「直耕」の実践

安藤昌益から約1世紀、H.D.ソローから約2世紀を遡る佐瀬与次右衛門は会津地方の肝煎として農業技術の発展に寄与し、『会津農書』、『会津農書附録』および『会津歌農書』を書き残した「直耕」の実践者である。前二者(昌益・ソロー)をふまえ、与次右衛門による農民的「直耕」論について述べたい。

「用<sub>二</sub>天の道<sub>一</sub>、因<sub>二</sub>地の利<sub>一</sub>に、且人の事を尽ハ、天地の化育を賛るの類成へし。是を守て失ハす、其上に禍を除き、福を受ん事を神明に禱らハ、自然の感応ありて必作徳を得へし。此理を不知して徒に勤る者は、仮令成熟を得る人有共、幸にして不作の難を免れたる成へし。」(佐瀬[1982a], p.359)

ここで与次右衛門は、転定(自然)の直耕と人間の直耕を結ぶ昌益の「直耕」概念や地上の動植物を育む自然(神)を受容するソローの自然観・人生観を「天地の化育を賛る」と表現していると考えられる。

禍(災厄)を免れ、福(仕合わせ)を受けることを神に祈るという行為は現代科学の規範的意識下では宗教的妄信に見える。だが、その「祈り」とは植生観察に基づく気象予測や土壌分析・肥培管理の後になされる感謝の表現である。人間が生み出す技術は、時代の経過とともに変化する価値観に依存した認識論や機器・資材等の影響を受けるが、投入・産出を含む自然環境は人間活動の枠外にあり、農業系を外部から制御する。したがって、自然循環農法では自然生態系(転定)との関係が重視されるのである。

その点について与次右衛門は、「天の道を用る」とは「四時の気候、時令を能勘へて農業を務るといへる事成へし。嘗て天の道に常例あれ共、暫く不正の気ありて春の日布而寒き事あり、夏の日布冷か成事あり、秋冬も又如此なり。是を以時の宜を計て事を用へし」(佐瀬[1982a], pp.359-360)とし、「異常気象」対策が射程に収められている。江戸時代

---

ことなど少しも気にならなかった」(ソロー[1995a], p.202)

<sup>12</sup> ソローの住居跡の碑には以下の文章が刻まれている。“I went to the woods because I wished to live deliberately, to front only the essential facts of life, and see if I could not learn what it had to teach, and not, when I came to to die, discover that I had not lived.” (Thoreau[1995], p.59)

<sup>13</sup> (1)「生活を質的に高めることこそ、最高の芸術にほかならない」(ソロー[1995a], p.162)

(2)「意識的な努力によって自分の生活を高める能力が、まちがいなく人間にはそなわっている」(ソロー[1995a], p.162) (3)「あらゆる人間は、自分が崇拝する神に捧げた肉体という神殿を、純粋に自己流の様式で建てる建築師であり(中略)彫刻家であり、画家であって、その材料はわれわれ自身の血と肉と骨である」(ソロー[1995b], p.94)

の前期後半<sup>14</sup>には冷害や飢饉が発生し、会津地方でも気象予測や異常気象に備えた技術開発が喫緊の課題になっていたと考えられる<sup>15</sup>。

その中心が「地の利」（立地，土壤，施肥，土づくり等）の重視であったと考えられる。すなわち，「土ハ五行の母として万物を生育す。其色と其味ひと高下，燥湿の土宜を能弁へて五穀を播すと言ふ事なるへし。地の利に定りたる位あれども，其土脈，其性によつて用へき物あり，用へからざる物あり，是能知へし。特に土ハ中央に位す。此理を知りて推極る人ハ，不偏不倚，無<sub>二</sub>過不及<sub>一</sub>の中をもしるへし」（佐瀬[1982a], p.360）として土壤分析や肥培管理による制御法を通して「土」の重要性を示している<sup>16</sup>。

第三に，「人の事を尽す」は，「耕に匱あり，密あり，耘も同じ。種子を取に時あり，是を置に品有，種子に実する物有，虚する物有，軽き物あり，重き物有，土の肥礫に随て培壅する品あり，用水の術有，此等を能考へて勤る也。又奴僕を使ふにも耕に得たる人有，耘に得たる人あり，かれに長せるあり，これに短なるあり。其人につきて其用を知て子弟を教ふことく，寒暖，飢飽を量て其四脈を使ふことならしめハ，令せずして其事成就すへし。」（佐瀬[1982a], pp.360-361）

まず，多様な人間の個性は立地や土壤とは異なり，自助努力による変更が可能ではある。しかし，与次右衛門は「天の道」「地の利」と同様に所与とし，天与の個性の生かし方を解く。いわば「共生型戦略」である<sup>17</sup>。作物の種類や土壤の種類・立地条件によって異なる耕耘法（耕），除草法（耘），播種時期（時），種子の比重（軽重）による品質（品）や実歩合（実虚）への影響，施肥法や肥培管理（肥礫・培壅）や用水法（術）などについて熟慮を重ねたうえで，使用人の個性（耕耘の巧拙）に応じた教育を行い，日ごろから体調や食欲（寒暖・飢飽）を気遣っていれば，細かな指図をする必要もなく，所期の目標が達成できると与次右衛門は説いている。その解法は天地の場合と同様に邂逅する人々の活用に入れられ，個性を引き出す教育が重視されている。天の道を用い，地の利に因ると人事を尽くすとは，共に単一尺度で形式的な優劣を定め，画一化んによって刹那的な生産性向上を追求する価値規範とは明らかに異質の理念である。

## 5. キャンパスとしての針道集落

ソローは「農村立地型」大学論を主張している<sup>18</sup>。すなわち，「いまこそ村々が大学となり，年配の住民は大学特別研究員<sup>19</sup>となつて，生活に十分なゆとりができたならば，余暇を利用して余生を自己の教養の向上につとめるべきである。」（ソロー[1995a], p.194）

「正典化<sup>20</sup>」によって米国文学の周辺領域における異端から中心に移動し，米国人が身につけるべき教養とされるソローの著作はテキストとして使用されることによる弊害をも

<sup>14</sup> 『会津農書附録』の執筆時期と推定される江戸時代元禄期。

<sup>15</sup> 萩川[2016]，萩川[2019b]参照。

<sup>16</sup> 萩川[2017], pp.97-101, 萩川[2018], pp.185-187, 萩川[2019a], pp.103-109 参照。

<sup>17</sup> 鷺谷[2004], pp.58-78 参照。

<sup>18</sup> 1840年代の大学教育に関し，①経費削減，②無償化，③教育改革を指摘した（ソロー[1995a], pp.92-95）ソローが暮らしたボストン近郊の酪農地帯コンコードは“The Thoreau Society”が主催する国際学会が毎年開催されるアカデミックな都市となっている。

<sup>19</sup> ここでの大学特別研究員は「研究費を支給されて学内に生活し，多くは教授・講師・教員を兼ねる」（研究社[2002], p.895）高齢者を意味すると考えられる。

<sup>20</sup> 米国文学史におけるソローは教育的利用価値に基づいて辺境領域の異端から中心部の主流へと移動し，自然派に再帰（遷移）した（増田[2000], pp.548-555）。その過程はソロー自身が明らかにした自然の遷移を人間社会（文学界）が模倣したかのようである。

たらずことになったという<sup>21</sup>（増田[2000], pp.548-555）. とはいえ，知識偏重による教育の歪曲化を調整するための方法として“Walden”を導入する意義はそのような問題によって排除されるべきではないだろう. 村の大学（villages’ universities）やシニア研究員（elder inhabitants’ fellows）というアイディアは現代の先進国において実行可能性をもち，針道集落はそのモデルとして相応しい地域であると考えられる.



図 5-1 針道キャンパスの授業風景



図 5-2 ゲームに熱中する学生たち



図 5-3 針道キャンパス前の集合写真



図 5-4 針道キャンパス附属資料館



図 5-5 同館での授業風景

<sup>21</sup> H.D.Thoreau の“Walden”(1854)と“Resistance to Civil Government”(1849)は米国 11 年生教科書に必ず用いられ，各出版社は掲載箇所の違いで特色を出している（塩田[2017], p.3）とされ，“Walden”は米国大学授業で使用される文献リストの第 35 位に挙げられている。  
<https://id.fnshr.info/2016/03/18/us-textbook/>

## 6. 問題の解明と解決法 —実態調査と実証実験—

「若連<sup>22</sup>」を担い手とする「針道あばれ山車<sup>23</sup>」は諏訪神社の例大祭として継承される針道<sup>24</sup>の象徴的行事であり，張り子の大型人形を載せた山車同士を激しくぶつけ合う勇壮な路上パフォーマンスである．だが，困難な時代背景の中で維持されてきたその活力はかつての養蚕・蚕糸業に代わるビジネスを興すには至っていない．伝統的文化が重視されにくい世相の中で「あばれ山車」という舞台芸術の制作に取り組む針道集落に，起業家精神はどのように継承されているのだろうか．その問題意識の下，同じ中山間地立地型のビジネスとして脚光を浴びてきた「伊賀の里モクモク手づくりファーム」（三重県）および「いろどり」（徳島県）を念頭に，針道九区集落に継承される「起業家精神」（entrepreneurial spirits）に関する実態調査と実証実験に取り組んだ．

## 7. 2018年度における学生事業の活動について

### （1）集落に関する予備調査（2018年8月20日～21日）

8月20日，二本松市役所東和支所において針道集落の概要に関する説明を受けた後，「道の駅ふくしま東和」，「小手森城址」（「愛宕神社」），「隠津島神社」・「三重塔」（木幡），東京農工大の稲作試験圃場，民設・民営型の農村公園「今井公園」，「古民具資料館」を視察した．その後，宗形常夫区長を初めとする集落役員の方々との交流を行い，今後の調査日程等を調整するとともに調査内容および方法等に関する承諾を得た．また，針道集落についての関連文献・映像等の説明を受け，「後東若連」による「山車」制作現場を視察した．（図 2-1）

8月21日，前日に引き続き東和支所管内（「夏無沼自然公園」，「香野姫明神<sup>かやひめ</sup>」（図 2-2），「放射性廃棄物処理施設」，「羽山」（頂上から 360 度の眺望），「島山」（阿武隈川のカヌー競技場），「ふくしま農家の夢ワイン」（共同稚蚕飼育場の転用施設）の視察を実施した．



図 7-1 後東若連のあばれ山車製作現場



図 7-2 「香野姫明神」香野姫は藤原実方の妻<sup>さねかた</sup>

### （2）第 1 回集落調査（2018年9月22日～23日）

「古民具資料館」（図 2-3）で経済成長期の生活の変化を説明していただき，学生は貴重な学びができた．今井公園では農地に侵入したイノシシのごとく学生たちが子供向けの遊具で遊び回るハプニングがあり，体験学習等を通して腕白盛りの子供たちを多数見てきた今

<sup>22</sup> 「若連」は諏訪神社の氏子青年（15～30 歳）が構成する組織であり，町，前東，後東，西，宮秋，小手森，大町の 7 つの若連がある．

<sup>23</sup> 「針道のあばれ山車」は以下を参照．<https://www.youtube.com/watch?v=DZdyPcHkHto>

<sup>24</sup> 福島県二本松市東和支所管内にあり，川俣町との境界に位置している．

井さんから、「こういう場所に来ると学生さんたちも解放されてのびのびとした気分になれるのしょう」という有り難いお言葉をいただいた。その御礼に公園内の草取りをさせていただいたが、逆に、挽ぎたての胡瓜<sup>も</sup>をいただき、学生たちは恐縮した。初回調査は帰途の都市問題試論<sup>25</sup>を以て次回調査に引き継がれた。



図 7-3 「古民具資料館」(写真右下)



図 7-4 「今井公園」左側に交流・宿泊施設

「口太山」や「夏無沼自然公園」へのゲートウェイ（里地と里山の境界域）に位置する「今井公園」（図 2-4）は「減反政策」が本格化する 1980 年代から整備された。整備費の一部は建設会社等の協力で圧縮されたとはいえ、基本的には今井氏によって賄われた。公園整備以前は集落の日常的生活空間（里地）最奥部の棚田（農業機械利用が困難）として利用されており、整備されなければ放棄地化していたかもしれない。沢水を引き込んだ釣堀は線量レベルを測定してきたが、線量も許容範囲内に収まり、現在は教育施設として利用可能な状態にある。従来は集落行事、環境学習、スポーツ関係者の懇親会などを主な形態としてきた同公園の管理方法は再検討すべき時期を迎えつつあると考えられる。

### （3）第 2 回集落調査（2018 年 10 月 7 日）

「諏訪神社」例大祭の本祭り（10 月 7 日）当日、農家民宿「山里の家」で昼食をご馳走になった（図 2-5）後に、「あばれ山車」の体験型調査を実施し、「若連」が自作の山車を激突させる祭事が芸術的表現であることを体感した。針道集落の稲作は多くの冷害や飢饉に直面し<sup>26</sup>、絹産地として略奪の危険に曝れたことだろう。「あばれ山車」製作の協働精神はそのような逆境を乗り越え、再生への原動力として継承されてきたと考えられる。



図 7-5 「山里の家」での昼食風景「少し、お茶くらい」がすごいご馳走に

<sup>25</sup> 自然環境を維持する農村住民が都市への人口移動による農業環境問題や都市問題に関連しているとすれば、そこに着目することで環境問題と都市問題を同時に解決できるのではないか。その革新（核心）技術は高度情報化社会に適応するものだろう、といった議論であった。

<sup>26</sup> 冷害の要因である夏期の夜間気温の低下は「おいしい米」の生育条件であり、自然による恵みへの感謝はその意味でも妥当性をもつと考えられる。

#### (4) 第3回集落調査 (2018年10月～11月)

アンケート調査票を配布・回収していただいた。9割近くの回収結果となり、針道集落の組織力や団結力の強さを再認識した(調査結果は後述)。

#### (5) 事例調査：大正大学におけるプロジェクト教育調査

大学生事業の先行事例として大正大学プロジェクト教育を視察した。学生は地元住民や地方都市と協力しながら、独自の教育方法を通して地域ブランド化に取り組んでいる(図2-6)。また、産官学連携による地元商店街の振興にも積極的に参加し、巢鴨の歴史や文化を織り込んだ大正大学版「大学生事業」を展開し、「地域に貢献できる」学生の養成を地域創生学部のディプロマポリシーとして掲げている。



図 7-6 「ザ・ガモール1号店」(巢鴨)店内 図 7-7 針道集会所での報告会(2019年2月2日)

#### (6) 現地報告会 (2019年2月2～3日)

針道には「地域ブランド」の豊かなシーズがある。その原点は人間関係にあり、教育資源として活用できるのではないだろうか。現地報告会では、その課題と計画を話し合おうとした(図2-7)。農家民宿(「山里の家」など)に泊まり、施設(「今井公園」など)の説明を聞き、伝統的祭祀(「あばれ山車」)を見ただけに終わった点を反省し、冷害・飢饉・戦災(政宗が指揮した「小手森城の撫斬り」)・火災等の克服過程で「諏訪神社」を崇敬する心を育んできた精神性を針道の理念として情報発信することを提案したが、「経済活動なしに住民の意欲は生まれえない」、「男性中心でなく、女性の考えを聴くことも大切だ」という意見が出され、それが2019年度の草刈りや「マルシェ針道」につながった。

#### (7) 大学生事業活動報告会 (2019年2月9日, 福島市)

第1部(9報告)、第2部(5報告)、第3部(7報告)の3部構成で、参加14大学(東京藝術大学、福島大学、上智大学、立命館大学、東北文化学園大学、獨協大学、拓殖大学、近畿大学、国士館大学、桜美林大学、清泉女子大学、日本大学、宇都宮大学、東洋大学)・21グループ(下線は複数グループ参加大学)が独自の視点から地域支援活動について報告し、本学は伝統的祭祀とアニメを融合(聖俗習合)した「後東若連」のアート感覚、「香野姫」・「白猪」・「護王神社」などの伝説、「生物多様性保全」という現代的文脈<sup>27</sup>などに着目した「農村立地型キャンパス」の可能性に関する報告を行った。

<sup>27</sup> 「「文明」のグローバル化と「文化」の国際化」(藺田[2005], p.17)による経済成長と地球規模の環境問題の深刻化との同時併進。



当該報告は、都市・農村間共同幻想（精神的靱帯）の「芸術作品」（アート手拭い）による可視・可触化を試みた東京藝大「はっぴい『幻界』集落」、地域の歴史と現実の統合である「祭り（物語）」の更新・共有化を図った立命館大「サトゼミ・エンタープライズ」、サイクル・ツーリズムでアクセスの困難性を観光資源に変える構想を提起した近畿大「社会連携・国際学部合同チーム」などと共有するものであった。現時点では他大との交流はなされていないが、針道集落の里山（「口太山」）を隔てた川俣町で大学生事業に取り組む近畿大と連携できることを期待したい<sup>28</sup>。

## 8. 2019年度における学生事業の活動について

### （1）集落調査（2019年5月11日～12日）

5月11日：現地（二本松市東和支署管内）に到着後、道の駅「ふくしま東和」で産直売り場で地域特産物等の商品アイテムや販売方法等に関する調査を実施した。また、昼食時には、施設内の食堂で地元の特産物を素材にしたメニュー（桑の葉パウダーを練りこんだソバなど）を味わった。その後、「買い物困難者対応型」の「ファミリーマート針道店ますや<sup>29</sup>」に移動し、店舗内の視察および店員さんからの聞き取り調査などを実施した。新規開店前はスーパーマーケットであった同店は生鮮食品を扱い、イートインスペースも通常のコンビニに比べて大きかった。（図8-1）

さらに、針道地区で現地住民の方に指導していただきながら、水田周辺の害獣（主にイノシシ）の侵入を防ぐ目的で設置された電気柵の機能を保持するための除草作業を行い、学部PR動画撮影のために(株)テレモアドットコムを担当者が同行した<sup>30</sup>。（図8-2）また、集落独自の民設・民営による農村公園（今井公園）および「古民具資料館」に移動し、同施設の集落住民の懇親や小学生に対する環境教育的利用法などを含む持続的維持管理法について、設置者であり管理者でもある今井之博氏の説明を受けた。さらに、この日の夕刻から集落の役員を務める6名の方々（今井(勝)氏、今井(秀)氏、今井(良)氏、斎藤氏、佐久間氏、土屋氏、宗形氏（五十音順））との協議および懇親会を実施した。



図8-1 ファミリーマート針道店「ますや」



図8-2 東北文化学園大学のPR動画

5月12日：薪炭や食料の供給地として針道集落を支えてきた里山「口太山」（標高846m）は阿武隈山系「三名山」の一つである。早朝、会場に至るルートを確認し、農家民宿「山里の家」を出発した。山頂に登坂・到着後、二本松市針道振興会と川俣町大綱木自治会の共催による山開きの式典に参加した。山頂からの下山後、「夏無沼自然公園」内の「同

<sup>28</sup> 2019年時点で未達成だが、二本松市針道集落と川俣町大綱木集落は「口太山」を共同管理する関係にあり、2020年度も同課題の実現に向けて努力したい。

<sup>29</sup> 針道あばれ山車の主会場となる針道商店街の北端に位置している。

<sup>30</sup> この取材および撮影の成果は本学ホームページにおける学部紹介動画として掲載されている。 <http://www.tbgu.ac.jp/faculty/pm> 参照。

キャンプ場」で開催された懇親会<sup>31</sup>に参加した。なお、上記行程で、針道集落役員の仲介・調整により二本松市長の三保恵一氏らとの懇談機会に恵まれた<sup>32</sup>。(図 8-3)



図 8-3 「口太山」の山開き（口太山山頂）

### (2) 実験用機材の搬入 (2019年7月21日)

鶏耕実証実験機材を現地圃場に設置し、管理方法を話し合った。(図 8-4, 5) 同事業に参加する近畿大学の現地サイトである川俣町において住民に対する聞き取り調査を実施し、近畿大学の多様な地域支援活動(学内レシピコンペ優秀作品の川俣シャモ祭への出品, 甘藷の水耕栽培によるバイオマス利用によるエネルギー地域自給への挑戦および未来志向の環境教育支援活動, アンセリウムをコンセプトに掲げたオリジナル・ブランド商品の開発等)に係る知見を得た。鶏耕(チキントラクター)実証実験を大学間共同事業のシーズとして位置づけられないか検討することにした。



図 8-4 鶏耕実証実験の現地圃場



図 8-5 針道の鶏耕機

### (3) 交流活動 —マルシェ・ソフトボール・暑気払い—

大学生事業活動当日(8月3日), 車輛故障により交通手段を変更することになった。会議開始までに到着するための乗り換え時間は8分(仙山線着 9:33, 新幹線発 9:41), 対応の迅速さが求められる機会に恵まれた。針道到着後, 「道の駅ふくしま東和」で「マルシェ針道」について話し合いを行った。従来の経緯について説明後, 参加学生, 地域住民代表, 道の駅の職員(大槻氏)が意見交換を行い, 「桑の葉茶」および「桑の実ジャム」を中心とし, 「あばれ山車」など集落の観光資源をPRすることを「マルシェ針道」のテーマ「地域未利用資源の活用と観光開発」とする方針を確認した(図 8-6)。

<sup>31</sup> 養豚業が盛んな当地に相応しく, 参加者全員に対して口太山保全協議会の方々が超した地元食材100%の「豚汁」が振る舞われた。

<sup>32</sup> 山開きと懇親会は二本松市長のツイッターに掲載。 [https://twitter.com/miho\\_keiichi](https://twitter.com/miho_keiichi)



図 8-6 「道の駅ふくしま東和」地場野菜販売コーナー

その後、地域の精神的支柱である諏訪神社の現地調査を実施した。さらに、鶏耕機(チキントラクター)の実証実験圃場において除草状況や鶏の健康状態等に関する調査等を実施した。「あばれ山車」巡行ルートを踏査予定であったが、当日は気温 35℃以上(直射日光を受ける舗装道路上は 40℃超と推定)の猛暑日であったため、参加学生の健康状態を考えて予定を変更(割愛)し、日射量と気温が低下した午後 6 時頃に翌日(8/4)の交流会の会場である今井公園を訪問することにした。

8月4日:東和地区ソフトボール大会(チームの年齢合計 300 歳ルール)において針道「後東若連」を主力とする針道九区チームの戦いを観戦・応援(同チームは優勝)した後、今井公園での集落住民交流会に参加した。なお、同会には二本松市の三保恵一市長が参加し、地域活性化と大学生事業の可能性について意見交換を行う機会に恵まれた。(図 8-7~11)



図 8-7 「暑気払い」に臨む参加学生たち



図 8-8 焼き鳥の準備に奮闘する学生たち



図 8-9 三保市長と「後東若連」



図 8-10 齋藤区長の挨拶風景



図 8-11 今井公園での集合写真

#### (4) 補足調査

鶏耕機設置後 35 日時点 (2019 年 8 月 25 日) における鶏耕機設置に関して住民の意向を聞き、専門家を交えた現況調査を行った。それによれば  $7\text{m}^3$  (面積  $5.76\text{m}^2$ ) に 5 羽という飼育密度は適切な範囲内で草種嗜好性、草種管理、鶏卵生産用給餌、移動時の労力負荷等が課題とされたが、鶏を活用した除草作業は有望な遊休地活用策と期待される。なお、今井公園、夏無沼キャンプ場、口太山を巡回し、近畿大学や食農学部のある宮城大学との大学間連携を検討するために川俣 (近大)・坪沼 (宮城大) に関する予備調査を実施した。

#### (5) チキントラクターの先行事例に関する調査

2019 年 9 月 20 日～21 日、新潟県十日町市でチキントラクター (鶏耕機) の先行事例に関する調査を実施した。(図 8-12)



図 8-12 十日町市のチキントラクター

水田畦畔を鶏たちが元気に動き回り、産卵していた

鶏耕機は農業経営に新風を吹き込む可能性がある。“Animal Welfare”，「生命系」，多様性などを重視する価値観を媒介として，農業と環境教育，福祉などを組合せることによって相乗効果が期待される。例えば，鶏を飼った経験のある高齢者が子供たちに自らの知識や経験を教えることで生きがいを見出し，子供の環境・情操教育と高齢者の健康維持が併進するといった好循環である。さらに，なぜかチキントラクターの設置圃場には獣害が発生していなかった。根拠は必ずしも明らかではないが，私たち人間が考える以上に野生動物の世界における「棲み分け」のルールは厳守すべきものなのかもしれない。

## （6）学園祭の「マルシェ針道」

10月19日（土）、20日（日）の両日、東北文化学園祭で「マルシェ針道」を開催した。初日は雨天であったが、針道から駆けつけた集落の方々の豊富な経験と知恵と技術で乗り切れた<sup>33</sup>。しかし、多くの点で「お任せ」状態になった点は反省しなければならない。2日目は晴天に恵まれたが客足は伸びず、次年度への課題となった。若年層を中心に「桑」を知らない人が少なくなかった点に関し、桑の実をおやつ代わりにした筆者には隔世の感がある。だが、「桑の葉茶」の試飲や「桑の実ジャム」の試食をしてもらえただけでも、桑に関する一定の宣伝効果が認められ、「桑」を接点に「獣害」と「健康問題」を都市と農村の共通課題として考える機会ができれば、都市・農村交流を図るという課題は半歩ほど前進し得たと考えられる。（図 8-13, 14）



図 8-13 試飲を勧める学生達



図 8-14 学園祭の集合写真

かつての養蚕地帯では桑園が遊休化し、イノシシなどの野生生物が集落にアクセスする際の経路にされるなど針道集落にとっては喫緊の課題となっている。他方、都市で暮らす若者たちの多くは「桑」の木を見たこともなく、それがかつて輸出産業として日本の経済成長を支えていた蚕業の重要な生産要素（蚕の飼料）であったことなど、教科書でしか知りえない歴史的事実にはすぎないのかもしれない。

## 9. 集落意向調査

### （1）集落の課題と解決策に関する意見について

「モクモク」や「いろどり」と比較した場合、針道集落における「活性化」に向けた物語には曖昧で不鮮明な点も少なくない。集落が直面する課題や解決策を尋ねた意向調査（2018年10月～11月実施）の自由記入欄には以下の意見が寄せられた。

- A. 外部の人間が「住みたい」と思える地域にするにはどうすればよいのか、学生さんたちの目を見たユニークな提言を期待したい。（60代男性）
- B. 昔のいろんな年間行事を復活させ、皆で取り組めたらよいと思う。子供達に伝えていければ大切な教育になると思う。（50代男性）
- C. 不便さというデメリットを逆手に取り、自然を生かせれば集落の活性化につながると思うが、具体的な方法は思い浮かばない。（40代女性）
- D. 「若連」だけではなく家族も集まれる「場」や「時間」が必要です。集落の全員が参加できるイベントが活性化につながるのではないかと。（20代女性）

<sup>33</sup> 針道集落は台風19号による被害が発生し、行政関係者は被災者支援のために予定を切り上げて二本松に帰ることを余儀なくされた。約束を必ず守る謹厳実直かつ冷静沈着な対応に頭が下がる思いがした。

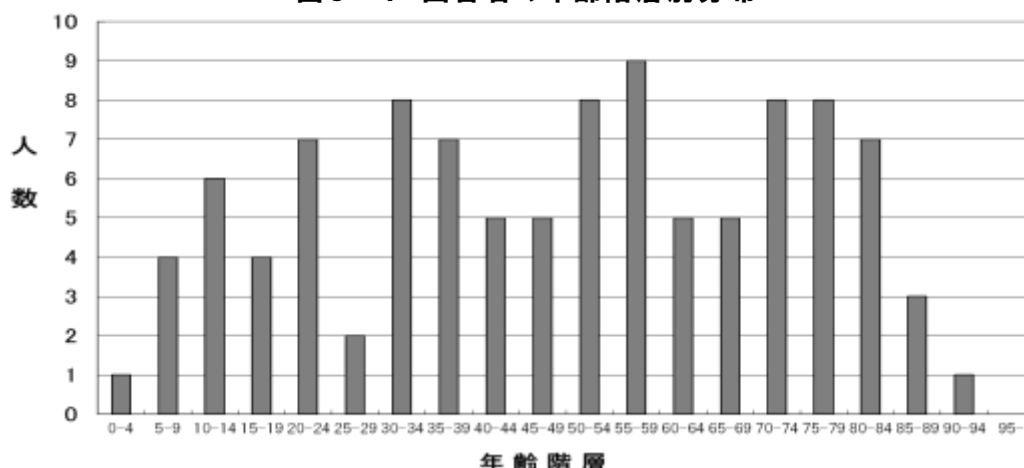
- E. 野菜の販売施設があれば、自分が作る野菜を売りたいという意欲が起きるのではないか。(70代女性)
- F. 放棄地でソバや小麦を栽培し、ソバ打ちやウドンづくりを体験すればよいと思います。(40代男性)
- G. 獣害や不耕作地の拡大が集落の問題です。(40代男性)
- H. 田んぼアートをするなど、楽しめるイベントで外部の人を集めることができれば活性化につながると思います。(30代女性)

以上の意見に共通する「獣害」・「放棄地」問題に焦点を当て、害獣であると同時に同じ地域に生きる野生生物であるイノシシとの共存を検討し<sup>34</sup>、遊休桑園を利用した特産品の開発について検討することになった<sup>35</sup>。

## (2) アンケート回答者の年齢別人口階層

針道集落における5歳刻みの年齢階層別分布には山と谷があるが、高齢層の偏りは顕著ではない。中山間地域に位置する針道集落だが、人口分布は日本の平均値に近いと考えられる。20代・40代に見られる「谷」は暫定的な他出期間を示し、集落外への移住後に集落に回帰するパターンが推測される。他出世帯員の多くが帰省する「あばれ山車」はその契機として位置付けられるのではないだろうか。

図9-1 回答者の年齢階層別分布



注)意向調査に基づく。回収率が8割を越え、人口分布を近似すると考えられる。

## (3) 意向調査の結果

2018年10月～11月に集落全戸を対象に地元の鎮守である「諏訪神社」、諏訪神社の例大祭として行われる「あばれ山車」、民設・民営の農村公園「今井公園」、「環境教育」、「農的自然博物館」などについて尋ねた。

<sup>34</sup> 針道の「針」は「墾(はり)」から転じたもので、針道は養蚕技術をもつ渡来系民族の入植地であったと考えられる。針道には養蚕縁起や「猪」由来の地名(「白猪森」)があり、針道の歴史物語は興味深い。

<sup>35</sup> 2019年8月の駅を再訪して学園祭での「マルシェ針道」開催について話し合い、「桑の葉茶」や「桑の実ジャム」を紹介・販売する方向が具体化した。

## I. 諏訪神社例大祭について

### 質問 1. あなたの生活にとって諏訪神社は大切な存在か？

住民の約 8 割が「大切な存在」と回答している。「後東若連」が山車制作を担い、例大祭で毎年「針道あばれ山車」が開催されている事実が回答を根拠づけていると考えられる。

### 質問 2. 諏訪神社の由来や歴史を知りたいか？

住民の約 7 割が肯定的（「由来や歴史を知りたい」）回答であり，否定的回答は 1 割程度であった。

### 質問 3. 文化や伝統の継承に「若連」は必要か？

住民の 9 割近く（87%）が肯定的回答であるが，少数の回答に着目することも重要であると考えられる。

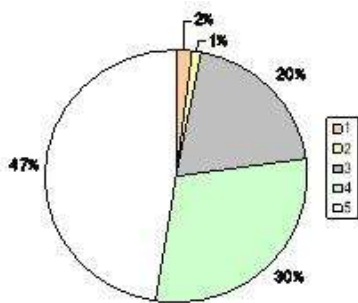


図 9-2 諏訪神社の重要性

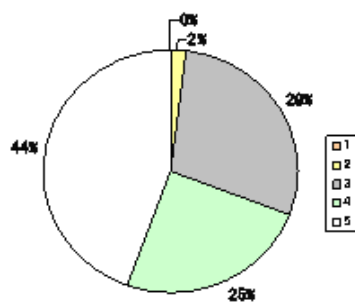


図 9-3 諏訪神社の由来・歴史

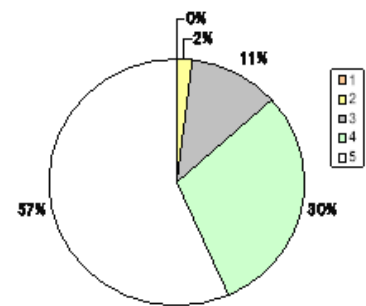


図 9-4 「若連」の必要性

### 質問 4. 諏訪神社例大祭に関心があるか？

約 8 割の住民が肯定的に回答し，「祭り」に対する住民の関心は高い。また，この質問の回答は「あばれ山車への関心」（相関係数 0.89）や「祭りの継続」（同 0.83）と関係し，神社と祭祀が一体として認識され，「あばれ山車」の制作意欲を生み出していると考えられる。

### 質問 5. 「あばれ山車」に関心があるか？

否定的回答はなく肯定回答率が 8 割を越えた（82%）。御神事，町廻り，神輿渡御，神輿奉送，樽神輿担ぎ，豊年様担ぎと続く儀式の総体である祭祀より，行事の一つである「あばれ山車」が支持された点は注目される。

### 質問 6. 「あばれ山車」のキャラクターに関心があるか？

肯定回答率は相対的に低く（73%），質問 1 との相関も低い（0.28）という特徴があり，伝統と革新とのバランスを考えさせる結果である。

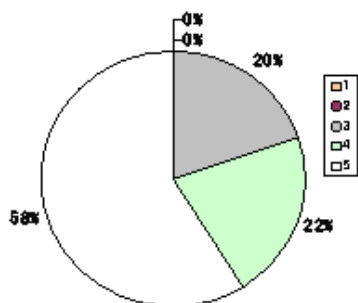


図 9-5 お祭りへの関心

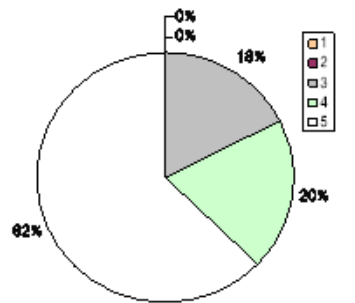


図 9-6 あばれ山車の関心

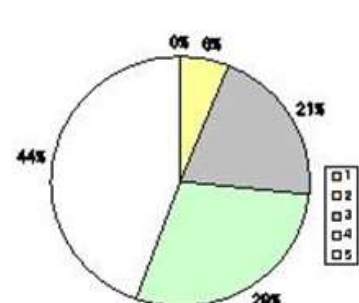


図 9-7 あばれ山車のキャラクター

### 質問7. 「あばれ山車」を今後も続けていくべきだと思うか？

高い肯定回答率（86%）に示された支持率の高さは祭り本番の雰囲気からも感じられた。「あばれ山車」の表舞台に立つ「若連」の活動は住民によって支えられ、住民同士の靱帯となっていると考えられる。

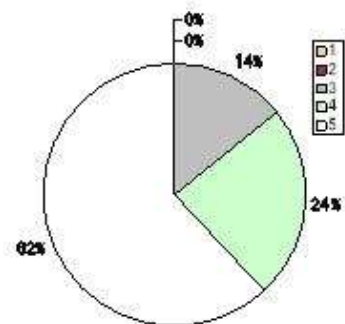


図 9-8 「あばれ山車」の継承

## II. 「今井公園」の活用について

### 質問8. 「今井公園」を利用したことがあるか？

集落北端に位置する「公園」を9割近くが利用し、複数利用者が8割を超えることが示された。主な利用形態は集落行事や野外学習だが、個人的に管理・運営されている同公園を継続的に活用するには、公共的な維持・管理の仕組みが必要であると考えられる。なお、質問8は①活性化、②集落維持、③環境教育との関連性が高い（相関係数は①0.49、②0.53、③0.55）。

### 質問9. 「今井公園」を活用した地域活性化は可能か？

肯定回答は45%であり、里山が果たしてきた地域資源の共同利用を代替していると考えられる。なお、質問9は①質問10（集落維持）および②質問12（環境教育利用）との関連性が高い（相関係数は各々①0.87、②0.71）。

### 質問10. 集落を維持するために「今井公園」は必要か？

集落の維持に対する今井公園の必要性を尋ねた質問に対する肯定的回答は47%であり、2019年の「暑気払い」に参加し、同公園が集落の維持に不可欠な共的空間であることが実感できた<sup>36</sup>。なお、この質問項目は質問12（環境教育的利用）との関連性が高い（相関係数は0.68）。

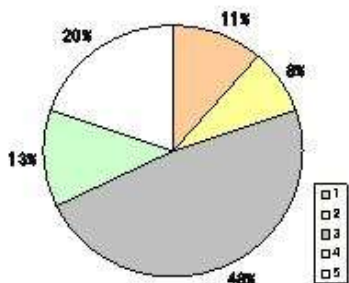


図 9-9 「今井公園」の利用回数

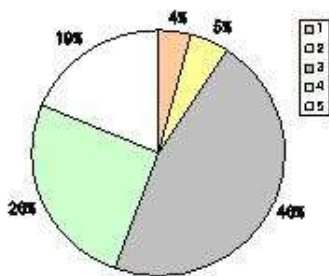


図 9-10 「今井公園」による活性化

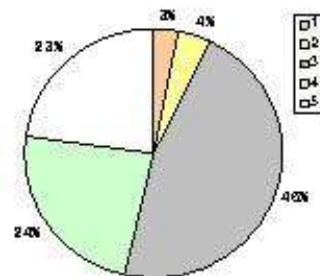


図 9-11 「今井公園」の必要性

<sup>36</sup> いうまでもなく、「共に生きる」実感には共通の「場」が必要である。



### 質問 1 1. 子どもたちに環境教育は必要か？

肯定回答率は 75%と高かった。子供たちの不安を煽る知識を無理に詰め込む必要はないが、現代社会を賢く生きるには環境教育が不可欠であり、子供たちに提供する環境教育の方法が問題であると考えられる。

### 質問 1 2. 「今井公園」の環境教育利用に関心があるか？

肯定回答率は 45%であり、子供たちに対する「環境教育」の場として今井公園を利用することに関心を持つ回答者が半数近くいる。なお、この質問項目が質問項目 1 3（農的自然博物館）との関連性が高い（相関係数は 0.62）。

### 質問 1 3. 「農的自然博物館」をつくる計画に協力したいか？

この質問に対する肯定的回答率は低い（33%）が、その回答結果は計画の内容次第で肯定的回答に変わりうると考えられる。

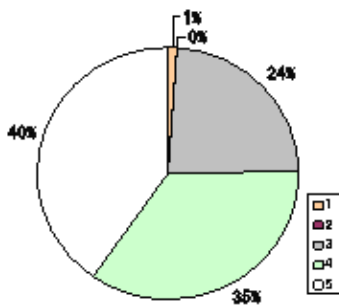


図 9-12 環境教育の必要性

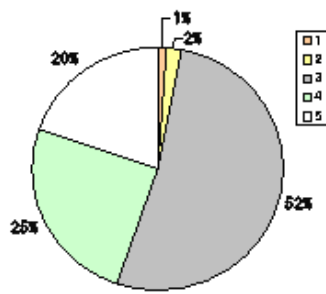


図 9-13 今井公園の環境教育利用

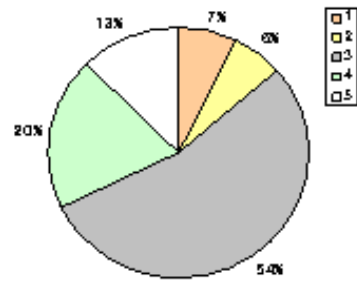


図 9-14 農的自然博物館

### 質問 1 4. 養蚕に代わる「針道ブランド」の基盤は何か？

回答の結果は、①祭礼、②交流、③自然、④農業、⑤生活、⑥文化、⑦観光、⑧その他、⑨教育の順であった。「若連」を教育組織と考え、自然環境を活用した教育ブランド化は考えられないだろうか。針道集落には斬新なアイデアを加えて維持してきた「あばれ山車」、民設・民営の共同利用施設「今井公園」、「口太山」や「夏無沼自然公園」へのゲートウェイ（山口<sup>やまのくち</sup>）という地利がある。地域資源に関する情報を発信し、自然や農地を活用した教育方法を開発していければ活路が開かれるのではないかと考えられる。

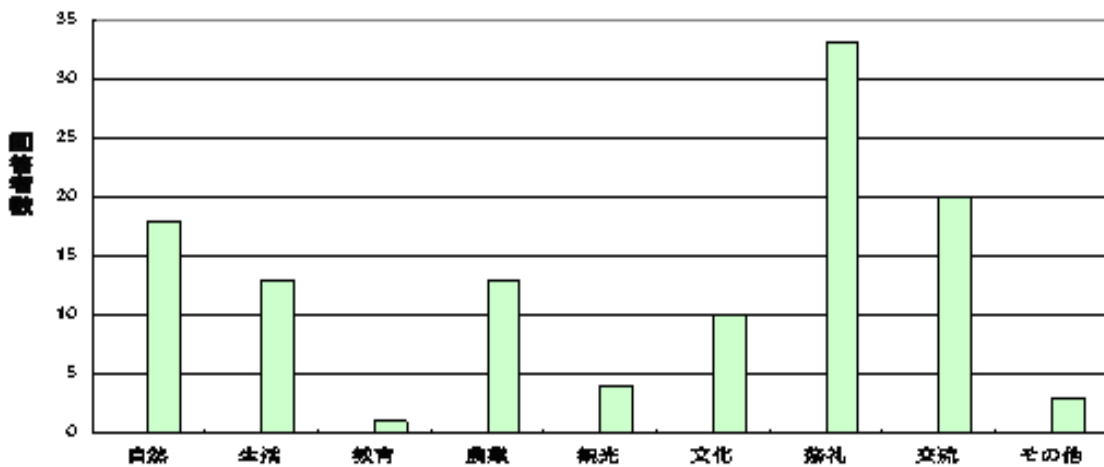


図 9-15 針道ブランドの共通基盤となるテーマ

表9-1 意向調査回答結果における各質問項目間の相関係数

項目区分	項目区分	回答者の属性				諏訪神社							今井公園						
		年齢	性別	職業	居住地	重要度	歴史	若連	祭り	あはれ山車	キャラクター	継承性	利用経験	活性化	コミュニティ	環境教育	教育利用	エコミゼ	
		a	b	c	d	e	f	g	h	i	j	k	l	m	n	o	p	q	
回答者の属性	年齢	a	1.0000																
	性別	b	0.2223	1.0000															
	職業	c	-0.0904	0.0917	1.0000														
	居住地	d	-0.0134	-0.0261	-0.0047	1.0000													
諏訪神社	重要度	e	-0.0383	-0.1202	-0.0506	-0.2997	1.0000												
	歴史	f	0.1479	-0.0332	-0.1172	-0.1768	0.5697	1.0000											
	若連	g	0.0921	-0.1819	-0.0820	-0.2882	0.4937	0.6500	1.0000										
	祭り	h	0.0864	-0.1768	-0.2038	-0.3306	0.4283	0.5758	0.7140	1.0000									
	あはれ山車	i	0.0245	-0.0739	-0.2132	-0.3337	0.4082	0.5807	0.6726	0.8859	1.0000								
	キャラクター	j	-0.0478	-0.0974	-0.0140	-0.2557	0.2822	0.5726	0.5335	0.5621	0.6097	1.0000							
	継承性	k	0.0226	-0.1620	-0.1738	-0.3287	0.5763	0.5775	0.7855	0.8319	0.8383	0.5798	1.0000						
今井公園	利用経験	l	-0.0240	-0.2247	-0.1229	-0.3117	0.1982	0.2212	0.3592	0.1884	0.2582	0.3032	0.3386	1.0000					
	活性化	m	0.0720	-0.0994	0.0052	-0.2868	0.3002	0.2635	0.1794	0.0816	0.1112	0.2954	0.1175	0.4869	1.0000				
	コミュニティ	n	0.0939	-0.1513	-0.0326	-0.2994	0.2928	0.2057	0.1840	0.1544	0.1377	0.2517	0.1713	0.5345	0.8713	1.0000			
	環境教育	o	0.1287	-0.0594	-0.1402	-0.3198	0.2562	0.4296	0.4063	0.2906	0.3171	0.2793	0.3466	0.3950	0.4650	0.4518	1.0000		
	教育利用	p	0.0607	-0.1371	-0.0888	-0.2440	0.2159	0.3280	0.2824	0.1860	0.2594	0.3762	0.2212	0.5490	0.7111	0.6847	0.5012	1.0000	
	エコミゼ	q	0.1215	-0.1118	-0.0232	0.0026	0.1064	0.2366	0.2228	0.1569	0.1822	0.3026	0.1854	0.4586	0.6072	0.5764	0.3186	0.6208	1.0000

注)2018年実施の意向調査に基づき、有効回答97件を対象に相関係数を算出した。

## 10. モクモク手づくりファーム

豚が主役のアミューズメント・パークを開設したモクモクは食と農の意識改革を目指し、テーマパークの運営、地ビールや手づくりハムの製造・販売のほか、外食事業を展開して成功を収め、高い評価を得た<sup>37</sup>。モクモクを誕生させた阿山町（三重県）と東和町（福島県）を比較した場合、類似点も少なくないが外部に向けたメッセージ性に隔たりがある。1980年代の阿山町は自由化による豚肉価格の低迷という市場環境に対抗できる豚肉加工品のブランド化（「伊賀豚」）を目指し、「食の安全性」や「美味しさ」を追求する「仲間<sup>38</sup>」である消費者とともに製造技術を研鑽<sup>39</sup>し、信頼される技術に基いて健康と安全にこだわる商品差別化を追求した。その点に成功の秘訣があると考えられる。市場という外部に向けた新企画に挑戦した旧阿山町と比べると旧東和町は内向きに見えるが、例えば、針道集落の祭祀が交代制の有能なリーダー（総務）の下に継承され、倫理観や技能を育成する地縁的人間関係を再生産しているように、その原因は大江（2008）の要件<sup>40</sup>不足ではなく、「過剰」にあり、外部人材へのニーズが希薄だったと考えられる<sup>41</sup>。だが、今後も豊富な人的・自然的資源は維持されるだけでよいのだろうか。

全酪連や三重県経済連に勤務後、木村修氏（元モクモク社長）とともにハム工房モクモクを設立し、伊賀豚ブランドの開発、贈答品用ハムの販売、体験学習型いちご狩りなど消費者ニーズを先取りする企画を生み出し、現在は自立福祉アドバイザーとして活躍する吉田修氏（元モクモク専務）は、モクモクを退職した後に肺癌と脳梗塞で闘病生活を送るが、後遺症を抱えながら自らの経験を障がいをもつ人たちが自信や生きがいをもって働ける場の提供に役立てようと奮闘している。自明のことであろうが、多くの人々が「常識」と捉える範囲を超えた発想をすぐに行動に移すことのできる精神性が成功した起業家に共通する特徴であると考えられる。

<sup>37</sup> ディズニーランドの愛好者が、園内で売られるディズニー商品に愛着を感じて購入する消費者心理をモクモクも利用したと金丸（2002）が指摘している。

<sup>38</sup> プロスポーツ界に摸して喩えるなら、プロ農業リーグ「モクモク」チームを応援するファンクラブ会員のような存在である。

<sup>39</sup> 現社長の松尾氏は本場のハムづくりを修得するためにドイツで研修した。

<sup>40</sup> 大江（2008）は活気ある地域の共通要因として、地域資源を活用した雇用、リーダーの存在、移住者による情報発信、自給的農を挙げている（iii～iv）。

<sup>41</sup> そのようなリーダーを必要とする危機に直面することがなかったといえる。

## 11. いろいろ

### (1) 起業に至る経緯

横石氏が農協に採用された当時の上勝町は展望のない林業やミカンにしがみつき、依存心と拒絶感が同居する山村だった(横石[2007], p.22-28)。1981年2月25日、上勝町を襲った異常寒波でミカンが全滅し、営農指導員の横石氏は退路を断たれた状況で「起業」を目指した。木の葉を地域資源に変え、起業を成功に導いた要因は出会い、発想、感性、販促、品質管理、品揃え、営業、情報機器などの要因から説明できるが、「自費で各地の料亭に通い詰め、給料は16年間、家に1円も入れなかった」(大江[2008], p.54) 起業家精神は経済的合理性とは程遠いものである<sup>42</sup>。

### (2) 「奇跡」を導いた偶然と必然

高齢者の勤労意欲と生きがいを両立した「いろいろ」は税収の財源を増やし、年金支出額・医療費の削減によって地域経営の好循環を生み出した(横石[2009], p.29)。閉鎖的であった上勝町の画期を創造した横石氏は、高齢者に出番と自信を与えるプロデューサーである。情報機器による市場アクセスで木の葉を現金化する高齢者の能力が発見され、80代の女性が年収500万円稼ぐ「職場」が生まれた。2008年にはマイクロソフト社が加わり、タブレット端末「いろいろちゃん」を使いこなす起業家として活躍する高齢者の姿がYouTube動画で閲覧できる状況が生まれている<sup>43</sup>。

### (3) 「産業福祉」による効果の検証

「産業福祉」効果を外部者が科学的に検証することは困難であると考えられる。その課題に取り組んだ徳島大学地域看護学グループの研究成果<sup>44</sup>(小林他[2007], p.33)を横石氏は以下のように紹介している<sup>45</sup>(横石[2009], pp.52-56)。すなわち、「働くことで自身の健康状態が良くなったと感じることにより、今の生活に対する満足感の向上や、加齢に対する否定的な気持ちの軽減を表す結果につながった」(分析結果)とし、考察部分について「働くことが生活リズムを維持しやすく、生活リズムが健康維持に重要であり、健康感が主観的幸福感に大きく影響を及ぼしている」(横石[2009], pp.52)と引用している。

ほぼ同じニュアンスではあるが、小林他[2007]の考察では、「高齢者の就業が QOL に強く関連していると考えられる。働くことで、生きがいや、自身の健康状態が良いと感じることにより、PGC モラールスケールの今の生活に対する満足感の向上や加齢に対する否定的な気持ちの軽減につながったと思われる」(小林他[2007, p.33]; 下線は引用者)とされ、「生活リズム」については「主観的健康感」との統計的「有意差 (p<0.05)」(同上)が指摘されている。また、同グループの藤井他[2011]は、2009年5月から9月に「産業に従事している高齢者」84人と「従事していない高齢者」81人を対象とする「自記式アンケート調査」を行い、「疲労蓄積度」や「高齢者の集まり」への参加度に基づき、産業に従事

<sup>42</sup> 料亭通いの代償として重篤な痛風や心疾患を患い生命の危機に直面した横石氏にとって、起業、営業、販促活動はまさしく命懸けの挑戦であった。

<sup>43</sup> ビジどこ (NTT ドコモ法人公式チャンネル)「明日への STORY」徳島県上勝町いろいろ (葉っぱビジネス) <https://www.youtube.com/watch?v=CfCnLPar6ao>

<sup>44</sup> 2006年8月から10月、「予備調査、本調査、訪問調査の流れで実施」、調査票の質問項目は「就業が QOL に影響をもたらすと考えられる事項」・「QOL 評価項目 (PGC モラールスケール・主観的健康感)」・「主体的健康づくりに関する事項」・「社会との交流に関する事項」などから構成され、「全従業員 188 名の 26.5%にあたる 52 名の回答」(小林他[2007], p.33)を統計的に分析した。

<sup>45</sup> 働いてお金を稼ぐことで高齢者を元気にする「産業福祉」は、明確な目的があれば「健康に気を付ける」(横石[2009], p.53)という常識に基づいている。

している高齢者は「余暇活動をする時間がないほどに仕事に力を注いでいる」(藤井他[2011], p.15)と指摘している<sup>46</sup>。当然ながら,在宅型個人営業主として年収数百万円を稼ぐ経済活動と,農村における慣行的な人間関係との間には「時間」によって制約される代替関係が存在する。「いろどり」の成功物語は,画一的な価値規範によって束縛されがちであった農村高齢者の多様な個性や能力の発揮できる「場」を拡張した点で評価されるべきであろう。

## 12. あばれ山車の歴史

今井良二氏<sup>りょうじ</sup>から提供いただいた貴重な写真に基づき,東京オリンピック前年の1963年(昭和38年)～バブル期の1990年(平成2年)における「後東若連」の歴代総務と「針道のあばれ山車」に載せる張り子のキャラクター(以下「張キャラ」と略記)の変遷に基づいて振り返りたい。

1963年の「後東若連」のメンバーは14名であった<sup>47</sup>。その14名の「若連」構成員に対して「総務」の佐久間寛氏が采配をふるい,張キャラに選んだ「福助」を約50日間の協働作業によって作り上げたと考えられる。オリンピック年の1964年(昭和39年)の張キャラは「金太郎」のように見えるが,若連が見当たらない。1965年(昭和40年)は16名で総務は佐久間鉄雄氏,張キャラはカワウソを模したマスコット人形のようなが,正体不明である。1966年は14名で土屋栄一氏,張キャラは江戸時代の郵便配達人「飛脚」。1967年(昭和42年)は14名で土屋喜彦一氏,張キャラは不明。1968年(昭和43年)は大内邦彦氏で張キャラは「怪物君」だが若連の姿は一部のみである。1969年(昭和44年)は15名で菅野保一郎氏,張キャラは不明。1970年(昭和45年)も15名で今井之博氏,張キャラクターは「まねき猫」だろうか。



図 12-1 1963年



図 12-2 1964年



図 12-3 1965年

<sup>46</sup> 但し,「いろどり」従事者は「現病歴のある人の割合が少なく,主体的な産業に従事できる程の健康状態を維持している」と説明されている。

<sup>47</sup> 年次毎に多少の変動はあるが,この数値(14,15名)が山車制作に要する適性規模であり,それが若連の年齢層(15~30歳)に相当する男性世代の人口調整要因(流出制御・回帰の誘因)として機能してきたと考えられる。



図 12-4 1966 年



図 12-5 1967 年



図 12-6 1968 年



図 12-7 1969 年



図 12-8 1970 年

1971 年（昭和 46 年）は 12 名で藤宮昭夫氏，張キャラは当時の人気怪獣のようだ．1972 年（昭和 47 年）は 13 名で嶋原儀三氏，張キャラは不明．1973 年（昭和 48 年）は 15 名で今井光男氏，張キャラはおそらく「象」だろう．1974 年（昭和 49 年）は 11 名で菅野次男氏，張キャラは前年の「象」の背中に「パンダ」（初来日は 1972 年）が乗っている．1975 年（昭和 50 年）は 13 名で斉藤菊男氏，張キャラは「白バイ警官」（この年，3 億円事件の時効が成立）．1976 年（昭和 51 年）は 12 名で相馬勝市氏，張キャラは「マジンガーZ」だろうか．1977 年（昭和 52 年）は 16 名で高橋一郎氏，張キャラは「大鉄人 17」（石森章太郎作，この年の 3 月に放映開始）．1978 年（昭和 53 年）は 14 名で斉藤康正氏，張キャラは「孫悟空」．1979 年（昭和 54 年）は 14 名で斉藤康正氏が再任，張キャラは「ドラえもん」．



図 12-9 1971 年



図 12-10 1972 年



図 12-11 1973 年



図 12-12 1974 年



図 12-13 1975 年



図 12-14 1976 年



図 12-15 1977 年



図 12-16 1978 年



図 12-17 1979 年

1980 年（昭和 55 年）は 17 名で大槻善一氏，張キャラは当時流行っていた「ヒゲダンス」を演じたドリフターズの「志村けん」だろう．1981 年（昭和 56 年）は 13 名で再び大槻善一氏，張キャラは「Dr. SLUM アラレちゃん」．1982 年（昭和 57 年）は 16 名で大槻貞男氏，張キャラは「あさりちゃん」．1983 年（昭和 57 年）は 14 名で大槻貞男氏が続投，張キャラは「おしん」．1984 年（昭和 59 年）は 15 名で菅野民男氏，張キャラは不明．1985 年（昭和 60 年）は 14 名で菅野民男氏，張キャラは「キャプテン翼」．



図 12-18 1980 年



図 12-19 1981 年



図 12-20 1982 年



図 12-21 1983 年



図 12-22 1984 年



図 12-23 1985 年

1986 年（昭和 61 年）は 16 名で宗形常夫氏，張キャラは「孫悟空（ドラゴンボール）」。  
1987 年（昭和 62 年）はメンバー不明で総務は今井良二氏，張キャラは「奇面組の一堂零（少年ジャンプ）」。  
1988 年（昭和 63 年）は 16 名で佐久間 剛氏，張キャラは不明。  
1989 年（平成元年）は 17 名で土屋忠栄氏，張キャラは「あんぱんマン」。  
1990 年（平成 2 年）は 13 名で土屋清昭氏，張キャラは不明。



図 12-24 1986 年



図 12-25 1987 年



図 12-26 1988 年



図 12-27 1989 年



図 12-28 1990 年

以上の 28 年間の実績に基づき、「あばれ山車」製作への投下労働量を算出した（表 7-2）。  
製作期間を 50 日間（盆明け～10 月上旬）とし，日平均の作業時間を 5 時間/人と仮定した  
場合，28 年間（1963～'90 年）の総労働時間は約 10 万時間となる。この推定値に基づい  
て考えた場合，農業部門の協働形態（共同作業慣行）が喪失された社会的状況下にお

いて、生涯続く強固な地縁的關係（コミュニティの精神的靱帯）を構築するためにはそれほどの時間が必要であったという解釈（推論）も可能だろう。

「時間」という指標によって示される資源量を経済活動に投下した場合には相応の経済的収益（貨幣価値）が得られたと考えられる。しかし、敢えてそのような選択をしなかったことによって、針道集落には強靱な「絆」と将来の集落を担う有望な若者が残り、伝統的な祭祀が「あばれ山車」という形で継承されてきたと考えられる。その無形の遺産の評価は継承者自身に委ねられるべきであろう。

表 1 2 - 2 「あばれ山車」制作に投入された労働量（推計値）

期間	1963-2019年	1963-1990年	1981-1990年	備考
年数(年)	57	28	10	
延人数(人)	818.52	402.08	151	
総時間数(人時)	163,704	80,416	30,200	4時間/日
	204,630	100,520	37,750	5時間/日
	245,556	120,624	45,300	6時間/日

註) 延人数の算出には欠測年を除く平均値を用いた。

### 1 3 . 大学生事業（2019 年度）の報告

#### （1）知事報告（福島県庁，2月7日）について

エコ・カフェ萩川の主力メンバーである3年次の学生が公務員模擬試験や合同説明会の日程と重なり、1年次の遠藤明日香さんが知事報告を担当することになった。以下に報告内容の要旨を転記するとともに、その勇気に敬意を表したい。（図 13-1）

「針道九区」は二本松市北端の集落です。毎年10月「針道のあばれ山車」という祭りが開催され、バドミントンやソフトボールなどのスポーツ活動も盛んな地域です。私たちは、その元気の秘訣が集落独自のイベントにあると考え、仮説を実証するためにイベントに参加させていただきました。その中から、草刈り、山開き、スポーツ大会と暑気払い、「マルシェ針道」について紹介したいと思います。

初めに、草刈りについてです。昨年度の活動をふまえ、イノシシを防ぐ「電気柵」周辺の草刈りをしました。ご存知かと思いますが、電気柵を維持するには漏電を防ぐ草刈りが必要です。その大変な作業を楽しくできないかと考え、ニワトリの力を借りる「チキントラクター」の導入を試みました。水田畔の除草とイノシシの見張りをニワトリに手伝ってもらいながら、新鮮な卵をいただくという一石二鳥の方法です。今後は子供たちの環境学習を兼ねた「草刈り」のイベント化を図りたいと思います。

次に山開きについて報告します。私は参加できませんでしたが、先輩方が「口太山」の山開きに参加しました。「口太山」は「朽ちる人の山」が訛った呼称で「姥捨て山」だったと言い伝えもあるそうですが、口太山の山開きに集まった高齢者の方々はとてもお元気そうだったそうです。口太山の麓にある夏無沼には大蛇にまつわる伝説もあり歴史の重みを感じさせる雰囲気があったと聞いています。

私が参加したのは定期試験の期間中でした。8月上旬、集落対抗のソフトボール大会を応援し、スポーツ交流を通じた集落の結束を実感しました。また、その後、民設・民営の「今井公園」で祝勝会を兼ねた景気払いに参加しました。集落の方々と一緒にバーベキューを楽しみましたが、食材は宿泊した農家民宿の方がつくったり、採集したりしたもので、「農村ならでは」の魅力を感じました。また、道の駅「ふくしま東和」で学園祭の企画「マルシェ針道」について話し合い、養蚕地帯だった「針道」を象徴する「桑」をテーマにし



ました。道の駅では、桑を素材にしたお茶やジャムのほかにジェラートも販売しています。残念ながらジェラートは不採用になってしまいましたが、学園祭ではお茶やジャムの試飲に加え、「あばれ山車」などの観光資源のPRも兼ねたマルシェを行いました。私は野球部の模擬店準備に追われていましたが、雨の中の開催となった初日、針道の方々は「あばれ山車」やスポーツ大会を通して培われた団結力を発揮されたそうです。

最後に、私たちを受け入れ、活動を支援していただいた針道九区の皆さま、大学生事業に関するご支援をいただいた福島県地域振興課や二本松市東和支所の皆さま方に対して、心から感謝したいと思います。有難うございました。



図 13-1 内堀知事と報告者



図 13-2 エコ・カフェ菟川の報告

## (2) 大学生事業報告会（福島市，2月8日）

既述の通り、就職活動の最中であつたが、今年度の大学生事業に参加した6名（菟川ゼミは5名）の3年次生のうち、当日の報告を引き受けた3名の学生（早坂君，鈴木君，遠藤君）が福島市で開催された大学生事業報告会（オープンカフェ）に参加した。以下，その報告内容の概要について転記したい。

### はじめに（早坂 俊祐）

私たちエコ・カフェ菟川が大学生事業に取り組んでいる針道九区は二本松市の北端に位置し、「口太山」の先は近畿大学が大学生事業に取り組む川俣町です。毎年10月には山車をぶつけあう「あばれ山車」という勇壮な祭りが開催され，バドミントンなどのスポーツも盛んな地域です。私たちは，その元気の秘訣が住民の方々が集う集落のイベントにあると考え，その仮説を実証するためにいくつかのイベントに参加させていただきました。今回の報告では，1. 獣害を防ぐ草刈り，2. 「口太山」の山開き，3. スポーツ大会と暑気払い，4. 「マルシェ針道」の開催，について紹介したいと思います。

#### 1. 獣害対策と草刈り（鈴木 基文）

昨年度の実態調査をふまえ，針道九区で農業を続けるには獣害を防ぐことが前提条件だと考えました。水田周辺には「電気柵」が張り巡らされていますが，雑草が触れると漏電して電圧が低下するので草刈りが不可欠です。私たちも実際に体験させてもらいましたが，作業は大変でした。そこでニワトリの力を借り，水田の畦畔を除草し，イノシシを見張り，生んだ卵をいただくという一石三鳥の「チキントラクター」も試みました。今後は子供たちの環境学習を兼ねた草刈りイベントなどについて考えていきたいと思っています。

#### 2. 口太山の山開き（鈴木 基文）

次に，針道九区の里山である「口太山」の山開きです。「口太山」は「朽ち人山」が訛った呼称で「姥捨て山」だそうですが，現在の口太山の山開きには多くの高齢者が集まり，健脚ぶりを誇っていました。山頂では東連峰を眺めながら二本松市長と記念撮影をし，針道集落の方が剣を担いで奉納した祠も見せていただきました。山開きのイベントでは抽選

会やスタンプラリーが行われ、鉢植えの花をもらいました。下山後に夏無沼キャンプ場で豚汁をご馳走になりましたが、大蛇にまつわる伝説がある夏無沼を含む自然公園は自然の豊かさと共に歴史の重みを感じることができるエリアだと感じました。

### 3. スポーツ大会と暑気払い（早坂 俊祐）

8月の炎天下、針道、木幡、太田、戸沢の各地区の小・中学校を統合した学校に隣接するグラウンドで行われた集落対抗のソフトボール大会を応援し、スポーツ交流を通じた集落の結束の強さを実感しました。その後、針道に戻り、民設・民営の「今井公園」で祝勝会を兼ねた暑気払いに参加しました。集落の方々と交流しながらBBQを楽しみましたが、その食材は宿泊した農家民宿の方がつくったもので、「農村ならではの」魅力を感じることができました。集落の団結力の大切を感じるとともに、私たちや外部の人間にも親近感もてる針道九区の良さをPRしていきたいと思います。

#### 4-1. 「マルシェ針道」出展企画の検討（遠藤 翔一郎）

道の駅「ふくしま東和」で学園祭の出展企画について話し合いました。「桑」はかつて養蚕地帯であった「針道」の代表的な作物ですが、現在は遊休化しています。血糖値の改善効果があるという桑の葉は健康食品として販売され、道の駅「ふくしま東和」ではお茶やジャムのほか、ジェラートの素材に「桑の葉」や「桑の実」を使用しています。私たちは道の駅の職員さんと話し合い、学園祭で「あばれ山車」などの観光資源の広報を兼ねた「マルシェ針道」を開催することにしました。また、スーパーとコンビニ体型の店舗「ますや」のイートインでコーヒーをご馳走になり、店舗の説明や現状を説明してもらいました。それらをふまえ、針道の特産物を販売する方法について考えていきたいと思います。

#### 4-2. 学園祭での「マルシェ針道」開催（遠藤 翔一郎）

10月19・20日、東北文化学園祭が開催され、集落の方々に来ていただきました。台風19号の被害のために来れなかった方もいたそうで学園祭初日も雨の中での開催でした。針道の方々はその悪条件の中で着々と準備を進め、「あばれ山車」やスポーツ大会を通して培われた団結力の強さを実感しました。「マルシェ針道」で「桑の葉」茶の試飲や「桑の実」ジャムの試食をした方から、「桑の葉は初めて」とか「桑の実は知らなかった」という声も聞かれました。「桑」は長い歴史をもつ蚕の飼料であり、ビタミン類が豊富に含まれ、人間の健康にも良いようです。そのPR方法を考えていきたいと思います。

#### おわりに（遠藤 翔一郎）

私たちを受け入れ、支援いただいた齋藤区長、宗形前区長をはじめ針道九区の皆さま、大学生事業に関するご支援をいただいた福島県地域振興課や二本松市東和支所の皆さま方に対して心から感謝したいと思います。有難うございました。（図13-2）

## 14. まとめ

「若連」が担う伝統的祭祀「あばれ山車」を中心とする針道九区集落の年中行事は住民の精神的靱帯をなす「起業家精神<sup>48</sup>」の発露であり、集落の活力源として位置付けられると考えられる。私たち（Reborn Cafe ポレポレ&エコ・カフェ萩川の参加者）が大学生事業を通して示すことができた成果は互いの能力格差を認識することで、山村の暮らしを成立させるには強靱な精神性や能力が必要とされる点を浮き彫りにしたことである。

世相を反映する新たなキャラクターを考案・制作し、それを楽しむ観客に対して山車を

<sup>48</sup> ここでの「起業家精神」とは、新規事業を興して成功に導く持続的な意志を意味している。すなわち、「実務家の習慣」（ソロー[1995], p.42）を身に付け、「進取の精神と勇気」を持ちながら、「自信に満ち、冷静で抜け目なく、冒険的で疲れを知らない」（ソロー[1995], p.215～216）輸出産業として繁栄した当時の「針道」ブランド養蚕・蚕糸業を想定している。

ぶつけ合うアトラクションを提供する若連は対価を求めることなく舞台を制作し、演じる路上パフォーマー的起業家集団と見なすことができる。そのサービスの実需者（観客）の多くが地縁者・血縁者であるという特殊性は存在するが、そこには歴史的に形成されてきた擬制的市場が形成されていると考えられるのである<sup>49</sup>。また、養蚕と織布の技術を伝えた「香野姫」の伝説やその危機を救った白いイノシシが棲む「白猪森」をつなぐ視点から、更新しつつ継承される「あばれ山車」の制作理念が浮上するのではないだろうか。

例えば、東北内陸部の前線基地であった針道（<sup>はり</sup>道）に柵戸として移住した渡来人が稲作に適さない土地で養蚕を興し（起業）、生産した絹織物を朝廷に納め、余剰分を生活必需品に換えて生活を営んでいたとすれば、当時きわめて貴重な絹を狙う外敵から集落を守る必然性があったと考えられる。それを儀式化したものが「あばれ山車」の原型<sup>プロトタイプ</sup>であり、張り子は「仮想敵」を表現したものであると想像できないだろうか<sup>50</sup>。その想像の世界において、生糸の輸出が近代化を牽引した明治時代<sup>51</sup>の遙か以前から針道には長い養蚕の歴史があり、それが途絶えた今もなお痕跡が祭祀として継承されているのである。ひと月半の共同作業によって若連は山車に載せる張り子を制作し、互いの山車を激突させる。それは、かつての絹産地共同体に防衛の重要性と同時に、「起業家精神<sup>52</sup>」を思い起こさせるためのコミュニタリアニズム（*communitarianism*）に基づく現代的宗教儀式であると考えられる。

## 引用文献

- [1] 大江正章[2015], 地域に希望ありーまち・人・仕事を創る, 岩波書店.
- [2] 大江 正章[2008], 地域の力ー食・農・まちづくり, 岩波書店.
- [3] 金丸 弘美[2002], 伊賀の里 新農業ビジネスただいま大奮闘, NAP.
- [4] 小林 珠美, 田中 寿恵, 多田 敏子[2007], 山間地域の高齢者の就業が QOL に影響を及ぼす要因について, *Quality of Life Journal*, Vol.18, No.2.
- [5] 小林正也[2016], 神社と政治, KADOKAWA.
- [6] 佐瀬与次右衛門 [1968], 長谷川吉次編著, 会津農書, 佐瀬与次右衛門顕彰会.
- [7] 佐瀬与次右衛門 [1982a], 庄司吉之助・長谷川吉次・佐々木長生・小山卓校注・執筆, 日本農書全集第 19 巻, 農山漁村文化協会.
- [8] 佐瀬与次右衛門 [1982b], 長谷川吉次・小山卓現代語訳・解題, 日本農書全集第 20 巻, 農山漁村文化協会.
- [9] 塩田弘 [2017], アメリカの高校生が学ぶ教科書と『ウォールデン』, ヘンリー・ソロー研究論集, 43, 日本ソロー学会, pp.1-9.
- [10] 塩田弘 [2018], 語用論的能力育成のための『ウォールデン』ー高校教科書のアクティビティーを中心に, ヘンリー・ソロー研究論集, 43, 日本ソロー学会, pp.36-44.

---

<sup>49</sup> 2018 年, 老朽化した山車の車輪修理を LEADYFOR の寄付金で賄うクラウドファンディングが成立している。 <https://readyfor.jp/projects/15841>

<sup>50</sup> 「あばれ山車」の起源は戦国時代の天正 13 年（1585）、江戸時代の宝暦 8 年（1758）、天明 8 年（1788）など諸説ある。しかし、諏訪神社（針道来ヶ作）の建立は奈良時代の天平年間（730 年頃）とされ、平安時代の永承年間（1050 年頃）から神事が行われたという点から、時代を大きく遡る可能性も否定できない。また、1585 年は針道館の針道源太が滅ぼされた（「小手森城の撫で斬り」）年であり、他の年は飢饉直後にあたり、外敵（人災・天災）との関連性が推測される。

<sup>51</sup> 村上(2007)は、「蚕糸業が我が国の近代化の先駆として大きな役割を果たしてきた」という前提に立脚しながら、「蚕糸業の役割について“生糸輸出によって外貨を獲得することで国の近代化に大きな役割を果たしてきた”とする見方は一面的に過ぎるのではないか」という問題を提起し、「物創りの文化」の発展に関する貢献から「蚕糸業は、江戸時代に成熟した日本の文化・物創りの哲学を近代産業に受け継ぐ仲介者として重要な役割を果たした」としている。

<sup>52</sup> 「モクモク」や「いろどり」などの「起業家精神」とは明らかに異なる性格である。

- [11] 藪田稔[2005], 文化としての神道 ― 続・誰でも神道, 弘文堂.
- [12] ソロー, H.D.・飯田実訳 [1995a], 森の生活 (上), 岩波書店.
- [13] ソロー, H.D.・飯田実訳 [1995b], 森の生活 (下), 岩波書店.
- [14] 寺尾五郎[1996], 安藤昌益の自然哲学と医学, 農山漁村文化協会.
- [15] 秋川信弘 [2016], 地域農業システムの持続性に関する考察―『会津農書』に学ぶ農業経済学, 総合政策論集, 15-1, 東北文化学園大学, pp.3-34.
- [16] 秋川信弘 [2017], 世界農業遺産 (GIAHS) に関する考察―『会津農書』と“Walden”の視点から―, 総合政策論集, 16-1, 東北文化学園大学, pp.85-115.
- [17] 秋川信弘 [2018], 自然的価値の認識手段としての「農」―新たな「農」的文化風土をいかに創造するか―, 総合政策論集, 17-1, 東北文化学園大学, pp.169-196.
- [18] 秋川信弘 [2019a], 「食」, 「農」および「自然」―農的文化の継承に関する考察―, 総合政策論集, 18-1, 東北文化学園大学, pp.83-118.
- [19] 秋川信弘 [2019b], 『会津農書』成立の背景を物語る史料―『会津歌農書』と『会津農書附録』―, 総合政策論集, 18-1, 東北文化学園大学, pp.119-144.
- [20] 藤井 智恵子, 多田 敏子, 岡 久玲子, 松下 恭子[2011], 山間地域で主体的に運営する産業に従事している高齢者の保健行動, *The Journal of Nursing Investigation*, Vol.9, No.2.
- [21] 増田久美子 [2000], ソロー, <自然>を演出する:『ウォールデン』受容史にみる正典の形成, 一橋論叢, 123(3), 一橋大学, pp.548-555.
- [22] 村上 毅[2007], 我が国の蚕糸業の歴史と近代化過程における役割, 繊維学会誌 (繊維と工業), Vol.63, No.8, pp.209-212.
- [23] 横石 知二[2007], そうだ, 葉っぱを売ろう!, ソフトバンク クリエイティブ.
- [24] 横石 知二[2009], 生涯現役社会のつくり方, ソフトバンク クリエイティブ.
- [25] 鷺谷いづみ [2004], 自然再生 持続可能な生態系のために, 中央公論新社.
- [26] Thoreau, Henry David [1995], *Walden; or, Life in the Woods*, Dover Publications, Inc.
- [27] 「いろどり」 <https://www.irodori.co.jp/> (2019年12月8日閲覧)
- [28] 「上勝町」 <http://www.kamikatsu.jp/> (2019年12月8日閲覧)
- [29] 「福島県」 <https://www.pref.fukushima.lg.jp/sec/11025b/tiikishinkou-college1.html> (2019年12月8日閲覧)
- [30] 「吉田・織田合同地域創生研究所」 <http://www.ikigai6.com/> (2019年12月1日閲覧)
- [31] 「二本松市公式ウェブサイト」 <http://www.city.nihonmatsu.lg.jp/page/page003369.html> (2019年12月25日閲覧)
- [32] 「針道若連連合会公式サイト」 <https://j-fett.wixsite.com/abaredashi/yurai> (2019年12月25日閲覧)
- [33] 「日本の祭り」 <http://www.dydo-matsuri.com/archive/2015/harimichi/> (2019年12月25日閲覧)